福岡市埋蔵文化財調査報告書第1252集

井尻B遺跡　26

―井尻 B 遺跡第 40 次調査の報告―

２０１５

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1252集

井尻B遺跡　26

―井尻 B 遺跡第 40 次調査の報告―

遺跡略号　IGB-40
調査番号　1332

2015

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くからさまざまな地域との文化的交流を通じて発展を遂げてきました。市内各地には先人たちの築いてきた数多くの歴史的遺産があります。それらを保護し、未来へと伝えていくことは現在を生きる私たちの義務であります。

しかし、近年の都市開発によって貴重な文化財が失われていることも事実です。本市では開発によりやむを得ず破壊されていく遺跡の記録保存を行い、広く公開・活用するよう努めています。

本書は、店舗建設に伴う福岡市南区井尻B遺跡の第40次発掘調査について報告するものです。本調査地点では、弥生時代後期の竪穴住居跡が見つかり、当地域で暮らしていた人々の歴史を明らかにする貴重な発見となりました。これらの成果が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで多大なご協力をいただきました関係者の皆様と地元の方々に心からお礼を申し上げます。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が店舗建設に伴い、福岡市南区井尻4丁目167番2において実施した井尻B遺跡第40次発掘調査の報告書である。
2. 本書で使用した遺構実測図の作成は大森真衣子が、遺物実測図の作成は土器に関しては大森・大庭友子・服部瑞希が、石器は萩原博文がおこなった。
3. 本書で使用した挿図の製図は石器は萩原が、それ以外は名取さつき、大森がおこなった。
4. 本書で使用した遺構・遺物の写真撮影は大森がおこなった。
5. 本書に用いた方位はすべて磁北である。
6. 本書の執筆は大森がおこなった。
7. 遺構の呼称は竪穴住居跡をSC、溝をSD、井戸をSE、土坑をSKと略称する。
8. 本書にかかわる図面・写真・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管される予定である。
9. 本書の編集は大森がおこなった。

遺跡名	井尻B遺跡	調査次数	40次	調査略号	IGB-40
調査番号	1332	分布地図図幅名	025　井尻	遺跡登録番号	0090
申請地面積	227.83㎡	調査対象面積	185.2㎡	調査面積	142㎡
調査期間	平成25（2013）年11月11日～12月18日			事前審査番号	25-2-646
所在地	福岡市南区井尻4丁目167番2				

本文目次

第1章　はじめに …… 1
1. 調査に至る経緯 …… 1
2. 調査の組織 …… 1
第2章　位置と環境 …… 3
第3章　調査の記録 …… 4
1. 調査の概要 …… 4
2. 遺構と遺物 …… 7
1）住居址 …… 7
2）溝 …… 23
3）井戸 …… 23
4）土坑 …… 23
5）ピット …… 23
6）その他 …… 24
3. まとめ …… 25

挿図目次

第1図　井尻B遺跡と周辺の主な遺跡（1/25000） …… 2
第2図　井尻B遺跡既往調査位置図（1/7500） …… 4
第3図　調査区位置図（1/1000） …… 5
第4図　第40次調査区全体図（1/100） …… 6
第5図　SC004　実測図（1/40） …… 7
第6図　SC007　実測図（1/40） …… 8
第7図　SC007出土遺物実測図（1）（1/3） …… 10
第8図　SC007出土遺物実測図（2）（1/3） …… 11
第9図　SC007出土遺物実測図（3）（1/3） …… 12
第10図　SC007出土遺物実測図（4）（1/3・1/1） …… 14
第11図　SC015　実測図（1/40） …… 16
第12図　SC015出土遺物実測図（1）（1/3） …… 18
第13図　SC015出土遺物実測図（2）（1/3） …… 20
第14図　SC015出土遺物実測図（3）（1/3） …… 21
第15図　SC015柱穴出土遺物実測図（1/3、1/1） …… 22
第16図　SE021・SK002実測図（1/40） …… 23
第17図　ピット内出土遺物実測図（1/3） …… 24
第18図　包含層・表採遺物実測図（1/1） …… 24

図版目次

図版1　（1）Ⅰ区全景（東から）
（2）Ⅱ区全景（西から）
（3）Ⅲ区全景（西から）
（4）SC004・007（東から）
（5）SC015柱穴内土器出土状況（南から）
（6）SC015柱穴内碧玉出土状況（南から）
（7）SE021（南から）
（8）細石刃核出土状況（北から）

図版2　出土遺物

第１章 はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市南区井尻四丁目167番2における店舗建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成25年9月10日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財審査課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻B遺跡内に含まれていること、試掘調査が実施されて現地表面下50cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して事業主と協議を行った。

その結果、工事によってやむを得ず破壊される部分に関して発掘調査を行い、記録保存をするということで合意した。この合意に基づいて事業主を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、平成25年11月から発掘調査を実施し、翌平成26（2014）年度に資料整理および発掘調査報告書の作成をおこなうこととなった。なお、調査業務は国庫補助金適用を受けた受託事業として行った。

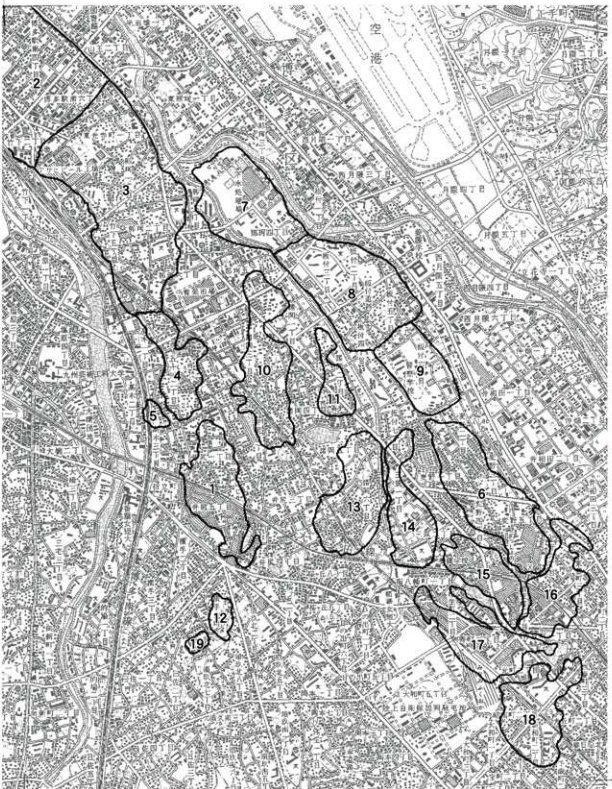
発掘調査は平成25年11月11日に着手し、12月18日に終了した。

２．調査の組織

調査委託：株式会社　江島屋
調査主体：福岡市教育委員会
（発掘調査：平成25年度　資料整理：平成26年度）

調査統括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課	課長	宮井善朗（平成25年度）
		常松幹雄（平成26年度）
	調査第１係長	常松幹雄（平成25年度）
		吉武学　（平成26年度）
庶　　務：文化財部埋蔵文化財審査課	管理係長	和田安之（平成25年度）
		内山広司（平成26年度）
	管理係	横田忍（平成25・26年度）
事前審査：文化財部埋蔵文化財審査課	事前審査係長	加藤良彦（平成25年度）
		佐藤一郎（平成26年度）
	事前審査係主任文化財主事	佐藤一郎（平成25年度）
		池田祐司（平成26年）
	事前審査係	森本幹彦（平成25年）
		比嘉えりか（平成26年）
調査担当：文化財部埋蔵文化財調査課	調査第１係	大森真衣子

調査作業：石川洋子　芹川淳子　田中トミ子　田中ゆみ子　北条こず江　水田政敏　水田ミヨ子
整理作業：鈴木静子



第1図　井尻B遺跡と周辺の主な遺跡（1/25000）

1.井尻Ｂ遺跡　2.比恵遺跡　3.那珂遺跡　4.五十川遺跡　5.井尻Ａ遺跡　6.麦野Ａ遺跡　7.那珂君休遺跡　8.板付遺跡　9.高畑遺跡　10.諸岡Ｂ遺跡
12.寺島遺跡　13.雑餉隈遺跡　14.三筑遺跡　15.麦野Ｂ遺跡　16.麦野Ｃ遺跡　17.南八幡遺跡　18.雑餉隈遺跡　19.笹抜遺跡

第２章 位置と環境

井尻B遺跡群は福岡平野を北流する那珂川と御笠川に挟まれた春日丘陵と総称される台地上に位置している。この台地はAso-4火砕流の堆積物からなる洪積台地で、堆積物上部の赤褐色土を鳥栖ローム、下部の白色粘土層を八女粘土と呼んでいる。春日丘陵は長年にわたる浸食により複雑な地形をなし、独立丘に分かれている。須玖丘陵上に位置する井尻遺跡をはじめ、独立丘陵上には奴国王の王墓地と推定される春日市所在の岡本遺跡や福岡市所在の五十川・那珂・比恵遺跡等が形成される。殊に弥生時代から古代にかけては密度高く遺跡の分布が確認されている。

井尻B遺跡については古くは青柳種信の著した「筑前国続風土記拾遺」に見られる。那珂郡井尻村の条では、「村の東南藤崎人家の後を大塚と云、塚有」や「百姓惣吉という者塚の際より鉾の鏃範を掘り出せり」や「古瓦多く出る。昔大寺など有し跡なるべきか」と記載されている。これを受け、九州帝国大学中山平次郎氏によって甕棺墓や瓦の包含層についての報告がなされることにより古くからその存在は知られていた。現在、井尻B遺跡における発掘調査は、昭和56（1981）年の第1次調査に始まり、以来41次にわたる調査が実施されている。これらの成果によって旧石器時代から古代にかけての遺構と遺物が確認され、少しずつではあるが遺跡の拡がりや集落の消長が解明されつつある。

井尻Ｂ遺跡においてもっとも古い生活の痕跡は旧石器時代にさかのぼる。主に台地の南端部で確認されており、遺構は未検出であるが、2次・11次・12次・37次調査ではローム上でナイフ形石器や「原ノ辻型」台形石器、細石器刃核などの良好な遺物が出土している。その後の縄文時代の遺構は時期が不明であるが6次調査で確認されている。遺物に関しては後出する遺構や包含層から草創期から晩期までの石器を中心に出土は確認されている。

弥生時代になると前期の板付Ⅱ式土器が散見されるようになり、中期になると甕棺墓などが広範囲に確認される。しかし分布としては16次・27次調査では北部域、20次調査では中央部域、34次調査は西南部域というように、非常に散漫である。また、14次・17次調査では後出する遺構からもこれらの時期の遺物が多く出土することを考慮すると、従来からの指摘の通り、当時期の遺構は削平され消失した可能性は高い。後期になると、竪穴住居や掘立柱建物を中心とする集落が丘陵の全域に拡がる。竪穴住居の多くはベッド状遺構をもち、その分布は濃密である。井尻Ｂ遺跡では特に鋳造に関連する遺物が多く確認されている。青銅器鋳型については6次調査で小形仿製鏡、銅鏃の鋳型、11次調査で銅矛や銅鏃の鋳型、14次調査では銅鏃の鋳型、17次調査で広形銅弋がある。製品と考えられる青銅器については、11次調査で有茎鏃、17次調査で小銅鐸、銅鏡等が確認されている。また、ガラス勾玉の鋳型が17次調査で出土しており、鋳造関連遺物として、取り瓶や銅が付着した甕等が17次調査で出土している。このことは、須玖岡本遺跡の近くにあって、弥生時代奴国で青銅器鋳造の一角を担った重要な位置を占めていたと考えられる。

古墳時代に入ると5世紀後半に2・5次調査で確認された前方後円墳の可能性のある円墳（井尻1号墳）が造営される。これに関連すると考えられる家形埴輪片が28次調査で出土している。この時期の集落の様相は不明である。

その後、6次・17次調査において掘立柱建物を中心に集落は展開し、特に17次調査地点では、現在の地割りとほぼ同方向の溝やこれに伴う瓦類も同時に検出されており、官衙的な施設の存在が指摘されている。また、7世紀後半から8世紀にかけては、11次調査地では「寺」銘のヘラ描き須恵器皿が出土し、1次・3次・14次・17次調査においては百済系単弁瓦などの丸瓦や平瓦が確認され、井尻廃寺の存在が指摘されている。

中世になると遺構は極めて薄くなり、中心は北の五十川遺跡に移ると考えられる。

第３章 調査の記録

１．調査の概要

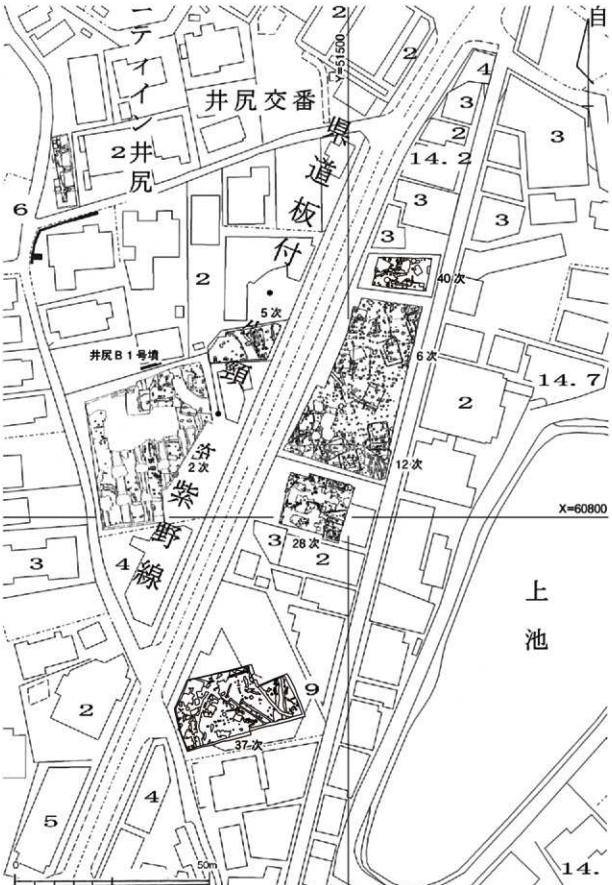
第40次調査地点は、井尻Ｂ遺跡南部、丘陵の中央尾根線上に位置している。遺構はいずれも地表下-50～60cmの黄褐色粘質土（鳥栖ローム）上での検出である。旧地形は後世の削平を大きく受け不明であるとともに、遺構面より上層はすべて現代の盛土である。遺構検出面の標高は13.5m前後を測る。土置場の関係上調査区を3分割し、西側調査区をⅠ区、東側北部をⅡ区、東側南部をⅢ区として調査を行った。

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代後期の竪穴式住居跡３基、弥生時代後期以降の井戸１基、土壙1基、溝1条等である。本調査地点は弥生時代後期の住居跡が多数検出され、青銅器鋳型が出土した6次調査と南側で接しており、この集落の拡がりを確認できた。しかし、本調査区の遺構密度は6次調査に比べ低い。おそらく、遺構検出面の標高が6次調査地よりも50cmほど低いことから後世の削平を本調査地点はより強く受けたものと考えられる。

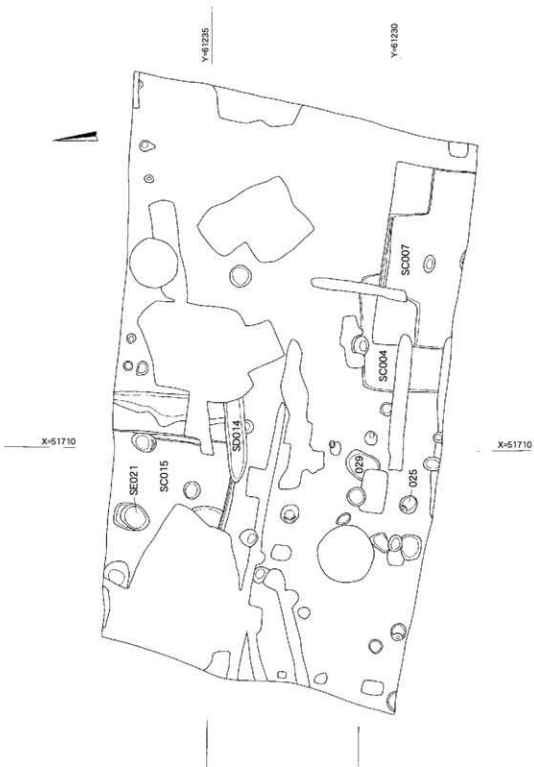
また、近隣の2次調査によって旧石器時代遺物が確認されているため、弥生時代遺構の調査終了後には任意で2m×2mのグリッドを設定し、旧石器時代の遺構・遺物の検出を行った。調査区の大半は削平を受けていたが、Ⅲ区から旧石器時代の細石刃核が1点出土している。

第2図　井尻B遺跡既往調査位置図（1/7500）

なお、今回の調査地点は、北側では50cm、東側では2m、南側では1mを作業上の通路として確保し、西側では、車両進入の関係上、既存道路から4mほど調査は困難であったため、調査対象面積の185.2㎡のうち142㎡の調査であった。しかし、後日、西側は工事立会をおこない、この部分は大きく削平を受けており遺構はないことを確認できたため、残りの南北および東側の隣地との境のみ未調査である。したがって、今後申請が上がった際は、未調査部分に関しては遺構の有無の確認が必要である。



第3図　調査区位置図（1/1000）



第4図　第40次調査区全体図（1/100）

2．遺構と遺物

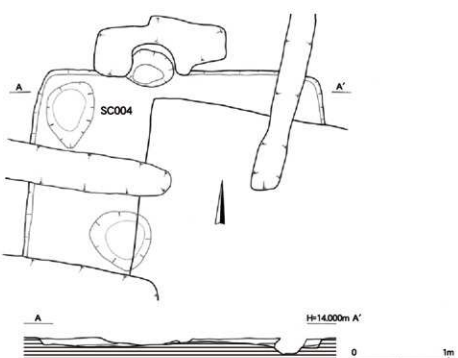
1）住居址

SC004（第5図　図版1（4））（004）

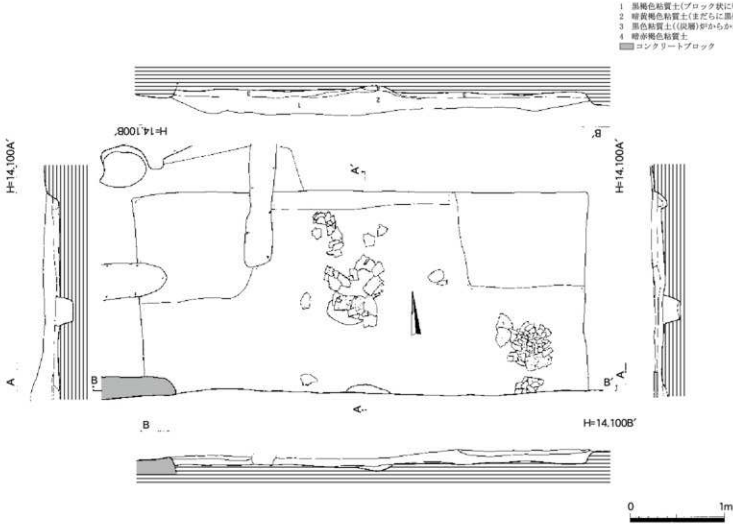
調査区南側で検出した。SC002と切り合い関係にあり本住居が先行する。後世の土地改良の影響を受け、南側は調査区外に広がっているため住居の形状の詳細は不明である。規模は東西長3.1m、南北長2.0m以上を測る。主柱穴は検出されなかった。遺存高は約10cmで、そのうち貼り床は3～5cmを測る。住居内埋土は黒褐色粘質土で炭をまばらに含んでおり、その下ににぶい黄褐色粘質土で床を作り出している。遺物は小片のみで図化することができるものはなかった。

SC007（第6図　図版1（4））（007）

調査区南東隅で検出した。SC004と切り合い関係にあり、本住居が後出する。住居南側が調査区外に広がるため、形状の詳細は不明である。規模は東西4.7m、南北2.1m以上を測る。主柱穴と考えられるピットは1本確認された。おそらく2本柱の住居と考えられる。調査区際中央からは幅50cm程度の円形状の窪みが調査区外に延びている。周囲は炭化物が多く、床面には被熱で赤変した部分も確認されたことから地床炉である可能性が高い。また東西の両隅に約1.4m×1.0mのベッド状遺構を取り付ける。検出時でのベッド状遺構の高さは床面から5cmほどで、黄褐色粘質土を貼り付けて作出されている。東西のベッド状遺構の間には幅20cm弱、深さ5cm程度の周壁溝が巡る。住居内埋土は茶褐色粘質土で、その下にはにぶい暗黄褐色粘質土の床を貼る。遺存高は約20cmである。その内床は5～7cmの厚さを測り中央部付近は周囲に比べ硬く締まっている。遺物は床直上で出土した。



第5図　SC004　実測図（1/40）



第6図　SC007　実測図（1/40）

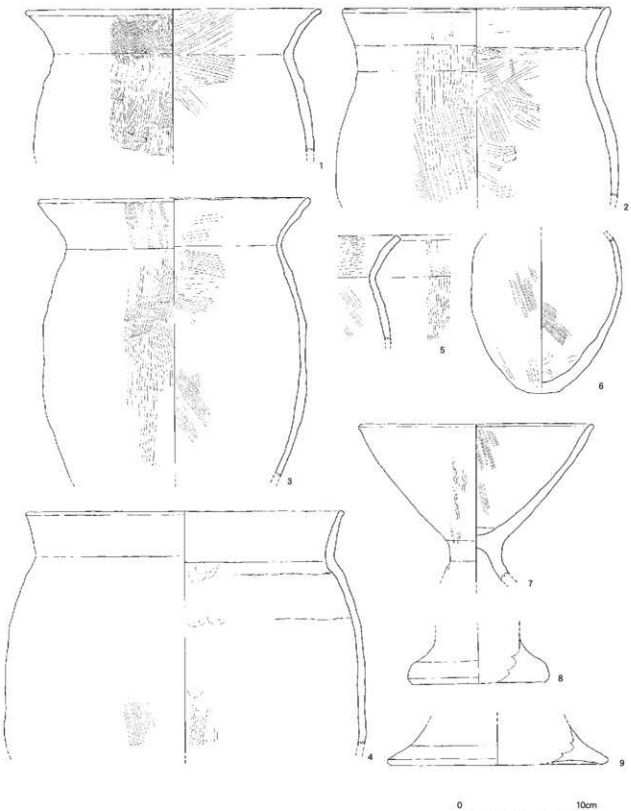
出土土器（第7～10図　図版2）

1～6は甕である。1は、口縁部から胴部上半にかけての破片で、復元口径は23.4ｃｍ、残存高は11.3cmである。やや張り気味の胴部から口縁部に向かって緩やかに外反する。口縁端部は強めの横方向のナデにより面を持っている。外面調整は胴部から口縁部にかけては縦方向のハケメ、頸部はナデによってハケメが消えている。内面調整はハケメ後ナデ調整が施されている。弥生時代後期前半頃と考えられる。2は、胴部中位から口縁部にかけての破片で、復元口径は21.5cm、残存高は15cmである。口縁部と胴部の境は非常に緩やかで、直立気味に口縁部へとつづく。外面調整は胴部がハケメ、口縁部はハケメ後ナデ調整である。内面は全面ハケメ後ナデ調整が施されているが、口縁部により強いナデ調整が施されており、ハケメ調整の痕跡が薄く残存するのみである。また、口縁部と胴部境は指頭圧の影響でハケメが消えている部分が認められる。弥生後期後半頃と考えられる。3は、胴部下半から口縁部にかけての破片である。復元口径は21.6cm、胴部最大径21cm、残存高は22.1cmである。胴部最大径は中位にあり、肩部は張らず口縁部は直線的に外反する。口縁部と胴部の境目は明確ではない。口縁端部は横方向のナデ調整により面が作出されている。外面調整は下から上方向に向かう縦方向の細かいハケメ調整である。口縁部は指オサエで最終的に整えられており、ハケメ調整が部分的に消えている。内面調整は胴部が外面よりも細かいハケメ調整後ナデ調整が施されている。口縁部は横方向のハケメ調整後ナデ調整である。胴部に比べて丁寧にナデ調整が施されている。弥生時代後期後半頃と考えられる。4は、胴部中位から口縁部にかけての破片である。復元口径は25.2cm、残存高は18.6cmである。胴部中位付近に最大径をもち、短めの口縁部が直線的に外反する。口縁端部付近は指オサエが施されている。そのため口縁端部が弱く下垂している。表面は磨滅が著しく、外面は胴部にハケメ後ナデ調整が、内面胴部にはハケメ後ナデ調整、口縁部はナデ調整が一部確認できるのみである。5は、胴部上半から口縁部にかけての破片である。残存高は8.3cmである。胴部と口縁部の境は明確ではなく、直線的に外反する口縁部をもつ。口縁端部はナデ調整により面が作出されている。外面調整は縦方向のハケメ調整であるが、口縁部では指オサエで整えられており、ハケメ調整の一部が消えている。内面調整は口縁部が横方向のハケメ調整、胴部は斜め方向のハケメ調整が施されているが、磨滅により詳細は不明である。6は、底部から胴部上半にかけての破片である。底部はレンズ状であり、胴部最大径を上位にもつ。磨滅が著しく器面調整の詳細は不明であるが、内外面はハケメ調整が一部認められる。

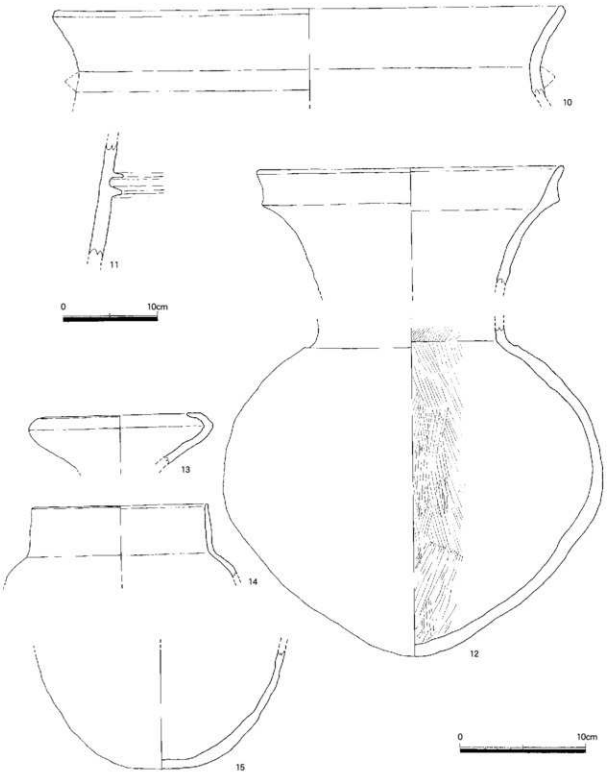
7～9は、脚台付の器種である。7は脚台付の鉢で脚部から口縁部までの破片である。復元口径は18.8cm、残存高は12.4cmである。弥生時代後期ごろか。8は、脚部の破片であるが壺か鉢か甕かは不明である。復元底径は11.2cm、残存高は3.9cmである。内外面調整はナデ調整が施されているが、作りは非常に粗い。ここでは、脚台部としているが、形状から器台の可能性もある。弥生時代後期頃か。9は、脚部の破片である。これも壺・甕・鉢のいずれに伴うのかは不明である。復元底径は17.4cm、残存高は3.2cmである。

10・11は、大型甕である。10は口縁部の破片である。復元口径は54cmで残存高は9.6cmを測り、甕棺に匹敵するサイズである。胴部と口縁部の境目部分が緩やかで、この部分に突帯が巡っていたであろうが、剥落しており痕跡のみ認められる。内外面共に摩滅が著しく調整は不明である。11は、胴部の破片である。厚みは1.4cmで、断面台形状の突帯が大小貼り付けられている。内外面共に摩滅が著しく、調整の詳細は不明である。

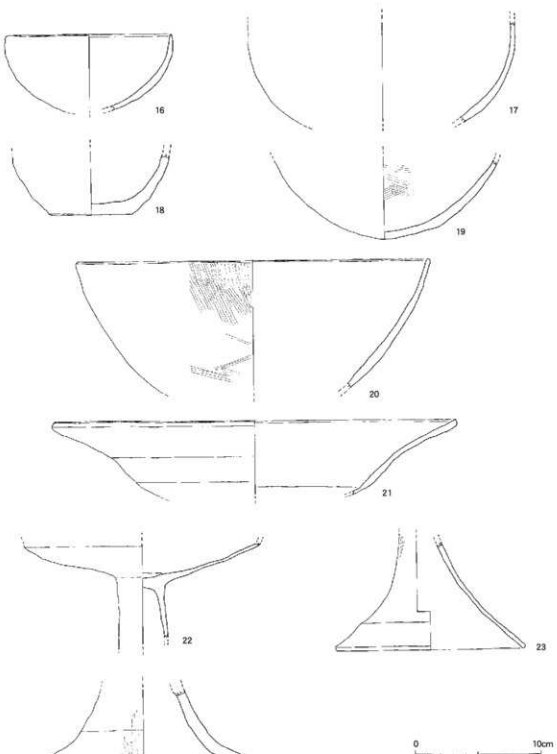
12～15は壺である。12は、複合口縁壺である。摩滅が著しく非常にもろい。口縁部に関しては細かい破片の接合資料であるため、傾きや口径など不安が残る。復元口径は24.4cm、胴部最大径は30cmである。底部は丸底に近いレンズ状の底部で、最大径を中位に測る胴部をもつ。頸部は短く開き、口縁部は逆くの



第7図　SC007出土遺物実測図（1）（1/3）



第8図　SC007出土遺物実測図（2）（1/3・1/4）



第9図　SC007出土遺物実測図（3）（1/3）

字を呈し、反転部が外彎気味のカーブを描くものである。外面は摩滅が激しく詳細は不明であるが、胴部内面はハケメ調整が認められる。13は複合口縁壺の口縁部の破片である。復元口径は14.5cm、残存高は4cmである。口縁部の屈曲部分が緩やかで稜線は入らない。反転部分は外彎気味のカーブを描く。内外面共に摩滅が著しく調整の詳細は不明である。14は直口壺の口縁部の破片である。復元口径は14.8cm、残存高は6.2cmである。口縁部はほぼ直立に立ち上がり、丸みを帯びる胴部へとつながる。内外面ともにナデ調整が施されている。胎土は直径1～2mm程度の白色砂粒をまばらに含み精緻とはいえない。15は壺の底部の破片である。平底に近いレンズ状を呈し、底部からの立ち上がりは外彎しながら胴部へとつながる。胴部と底部の境目は不明瞭である。弥生後期後半頃と考えられる。

16～20は鉢である。16は口縁部から底部付近までの破片である。復元口径は13cm、残存高は6cmである。底部の形態は不明である。底部から直線的に立ち上がり胴部は口縁部にかけて直立気味に外傾する。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ調整が施される。弥生後期後半と考えられる。17は、胴部の破片である。底部の形態は不明であるが、底部から外彎気味に立ち上がり、口縁部に向かって直立気味に立ち上がる胴部をもつ。18は底部から胴部にかけての破片である。復元底径は6.4cm、残存高は4.6cmである。底部は平底で底部からの立ち上がりは外反気味である。内外面ともにナデ調整が施される。19は、底部の破片である。底部は丸底で外彎気味にカーブを描きながら立ち上がる。内外面ともに摩滅が著しく、調整の詳細は不明であるが、内面にハケメ調整が認められる。20は、口縁部から底部付近までの破片である。復元口径は28cm、残存高は10.3cmである。直線的に胴部は立ち上がり口縁端部を丸く収める。外面調整は口縁部付近ではハケメ調整、胴部中位から底部にかけてはハケメ調整後ナデ調整が施されている。内面は横方向のナデ調整である。

21～24は高坏である。21は坏部の破片である。復元口径は32cmで、残存高は5.9cmである。坏部は緩やかに屈曲し、口縁部に向かって直線的に外に大きく開く。口縁端部は強い横方向のナデ調整により面が作出されている。内外面共にナデ調整が施されている。胎土は非常に精緻で作りが丁寧である。弥生後期後半頃と考えられる。22は、坏部下半から脚部にかけての破片である。直立する脚部から直線的に立ち上がる坏部へとつながる。23は、脚部の破片である。脚部復元径は15cm、残存高は9cmである。脚柱部と裾部との境が不明瞭である。脚端部は丸く収める。内外面ともにナデ調整が施されている。24は、脚部の破片である。脚部復元径は16.8cm、残存高は6cmである。脚柱部と裾部との境がやや認められ、口縁端部は丸く収める。外面調整は裾部がハケメ調整後ナデ調整、脚柱部は摩滅が激しく不明瞭であるがハケメ調整が一部確認でき、内面調整はナデ調整が施されている。

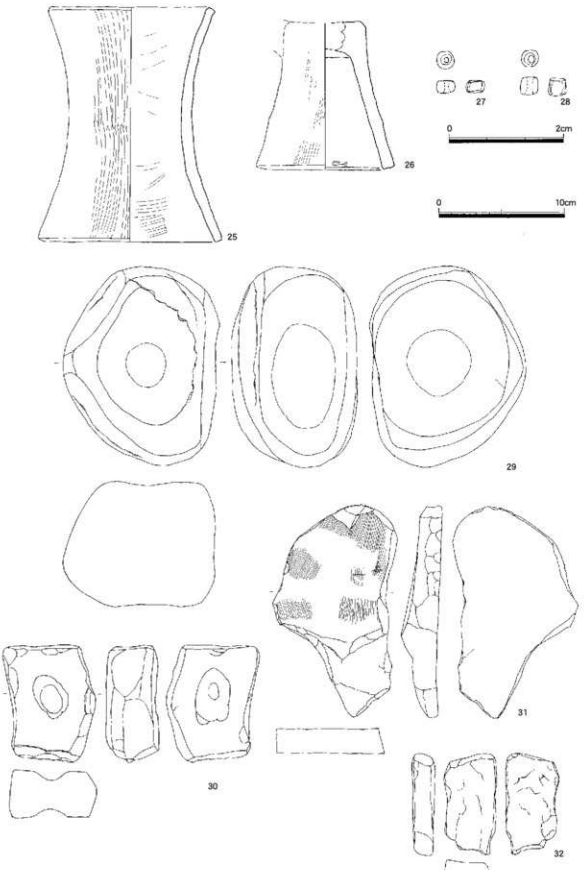
25は器台である。復元受部径は13.2cm、脚部径は14.6cmである。円筒形を呈し、受部と裾部の境が不明瞭である。胎土は直径3mm程度の白色砂粒を多く含んでおり、作りは非常に粗い。外面調整はハケメ調整、内面はハケメ調整後ナデ調整が施されている。26は支脚の破片である。残存率が1/8程で、天井部は一部しかないため、杏形支脚か台形支脚なのかは不明である。外面調整はハケメ調整後ナデ調整が施されている。内面は脚端部付近には横方向のハケメ調整が確認できる。

出土ガラス小玉（第10図）

27・28はガラス小玉である。住居の床の直上から出土した。27はコバルトブルーを呈し、直径5mm、厚み3mm、重さ0.9gである。28はコバルトブルーを呈し、直径5mm、厚み4mm、重さ0.13gである。

出土石器（第10図）

29・30は、凹石である。29は長さ15.7cm、幅12cm、厚み9.8cm、重さ2250gを測る。表裏の中央が径3ｃｍ前後で窪んでいる。右側面は磨いたように平滑で、中央付近が窪んでいる。河原石を利用していると考えられる。安山岩か。30は花崗岩製の凹石で、長さ9.3cm、幅7.3cm、厚み4.3cm、重さ426gを測る。



第10図　SC007出土遺物実測図（4）（1/3・1/1）

表裏ともに中央部付近は2cm×4cmの楕円形状に窪んでいる。その周辺はやや敲いた後のように凹凸が見られるが、人工的なものかどうかは不明である。

31・32は砥石である。31は長さ16.7cm、幅9.8cm、厚み2.78cm、重さ426gを測る。裏面は剥落しており詳細は不明である。表は全面的に研磨痕跡がみとめられ平滑で中央部にやや窪みがある。周縁部には細かい筋状の擦痕も認められる。砂岩製。32は長さ8.03cm、幅4.23cm、厚み1.64cm、重さ88.3gを測る。裏面は剥落しており詳細は不明。表面の一部に研磨の痕跡が認められる。側面はいずれも研磨の影響であろうか面ができているが、磨滅が激しく人工的なものであるのかの判断は困難である。蛇紋岩か。

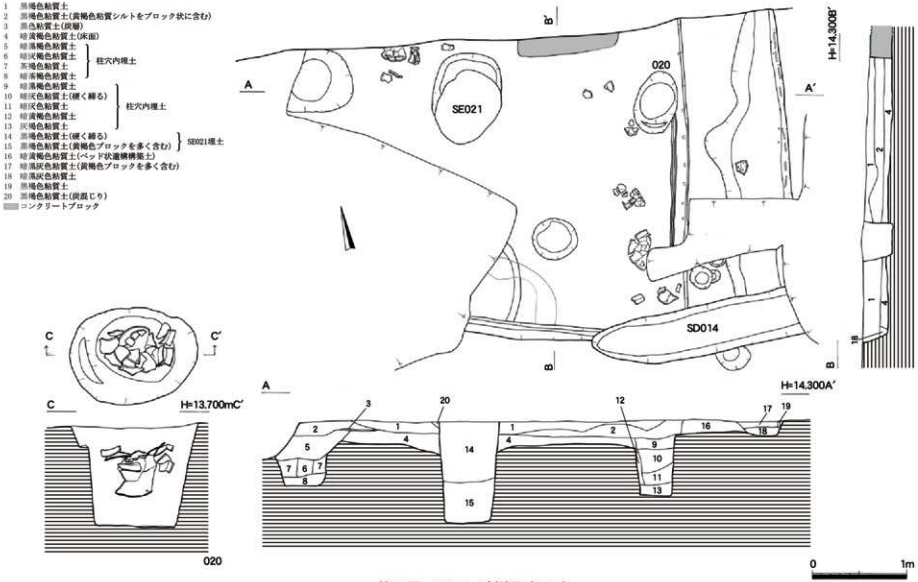
SC015（第11図　図版1（2））

調査区北西隅で検出した。土地改良の影響を強く受けており、形状・規模ともに詳細は不明である。主柱穴は2本確認できた。東側の柱穴中には甕が一個体廃棄されていた。完形ではなく破片の状態で出土したが、口縁部や底部などの部位が逆転することはないが、人工的に壊した痕跡も認められなかった。したがって柱を抜き、横置きよりはやや斜めに立てかけるようにして埋置したのちに埋戻しを行ったが、土圧により割れたものと考えられる。その甕の底部に近い胴部片の内側からは碧玉の剥片が出土している。このことから、甕の中に入れられたのちに甕ごと廃棄されたものと考えられる。

南側中央には屋内土坑が検出された。攪乱を受け全体像は把握できないが、幅120cm前後の半円形を呈するものであろう。住居中央付近には幅70cm、深さ7cmほどの窪みが確認された。後述するSK01によって半分以上は破壊されており、全体の形状等の把握は困難である。周囲は被熱により赤変した部分が確認でき、地床炉の可能性が高い。住居の東側には幅約1.1mのベッド状遺構が取り付けられている。検出時の床面からの高さは約10cmを測る。ベッド状遺構上には東壁沿いで深さ10cmほどの溝状の掘り込みが検出された。これは狭い部分では幅10cm、広い部分では幅90cmを測り直線的ではない。埋土は黒褐色粘質土で、この土を掘り上げると壁際で15cmほどの筋状の痕跡と直径5cmほどの小ピットが確認できた。これらは、ベッド状遺構西側の床面でも検出されている。ベッド製作時の土留め板と小杭の痕跡であろうか。幅20cmほどの周壁溝が住居南側に巡り、ベッド状遺構の西側床面にも一部確認されたが、柱穴にぶつかりそのまま消滅する。遺存高は30cm弱で、その内貼り床の厚さは5～8cm程である。本住居は調査区外の北側にさらに広がると考えらえる。

出土土器（第12図　図版2）

33・34は甕である。33は、残存率は3分の2程度底部から口縁部までの甕の破片である。復元口径は19cm、器高は20.2cm、胴部最大径は18.2cmである。底部はやや平坦な部分も見られるが、丸底である。胴部に向かって緩やかに曲線を描きながら立ち上がり、胴部最大径は中位以上である。肩部は張らず、緩やかに口縁部へと続く。口縁部と胴部の境目は、外面は明瞭ではないが内面はくっきりと境目が認められる。口縁部は成形時の指オサエの影響であろうか、均一な厚みではなく、器面の凹凸が確認できる。口縁端部はナデ調整の影響により面が作出されている。外面調整は、口縁部に関しては、横及び斜め方向のハケメ調整後、指オサエに近いナデ調整が施されている。胴部上位には平行タタキの後、斜め方向のハケメ調整である。胴部下位はハケメ調整である。胴部の上位と下位ではハケメ調整の原体を変えているようで、上位のハケメは1cm中7～8本と細かいものであるのに対し、下位のハケメは1cm中4本程度と比較的粗い。また、調整の方向に関しても上位は方向をそろえ非常に丁寧なやり方を用いているのに対し、下位の方向はランダムで一見して粗い印象を受ける。底部は磨滅が著しく調整の詳細は不明である。内面は、口縁部は横方向のハケメ調整で一部磨滅により消えている部分がある。底部から胴部はハケメ調整である。方向は一定ではないが、比較的胴部上位の方が丁寧である。胴部下半は調整後に指オサエに近いナデが施されており、指頭圧痕が認められる。弥生後期後半から終末頃と考えられる。34は、ほぼ完形品の甕



第11図　SC015　実測図（1/40）

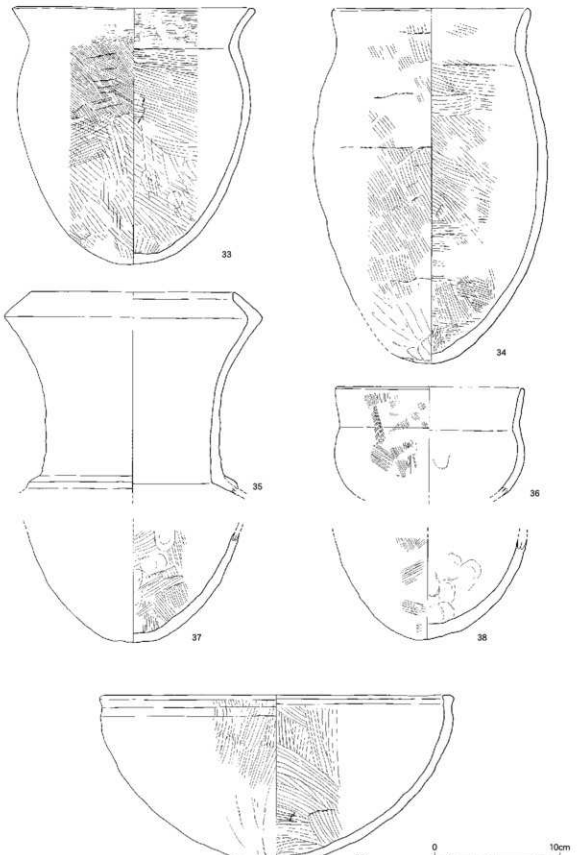
である。復元口径は15.6cm、器高は28cm、胴部最大径は18.3cmである。底部は丸底に近いレンズ状を呈し、緩やかにカーブ描きながら胴部へ立ち上がる。胴部の最大径を中位に持ち、そこからやや直線的な肩部から緩やかに口縁部は外反する。口縁端部は、面取りはされていない。外面調整は口縁部から胴部中位までは磨滅が著しく明瞭ではないが、縦方向のハケメ調整が施されている。胴部下半は縦方向のハケメ調整で、底部は指によるナデ調整が認められる。底部のナデ調整は非常に強く施されているため、一見すると板状の工具を使用しているようにも見える。砂粒の移動方向から下から上に向かってナデをおこなっている可能性が高い。内面調整は口縁部の磨滅が激しく一部で斜め方向のハケメ調整が認められるに過ぎない。胴部上位は横方向のハケメ調整、胴部中位は斜め方向、底部は器面に沿う形でのハケメ調整が施されている。内外ともに底部側からの調整である。また、外面胴部中位に幅7cm～10cmの帯状に薄くではあるがススが付着している。ススは土器の反面しか認められない。弥生後期後半から終末頃と考えられる。

35は、複合口縁壺の口頸部の破片である。復元口径は15.6cm、残存高は15.9cmである。胴部と口頸部境には断面三角形の突帯を貼り付けている。口頸部は直立したのちに外反し、口縁屈曲部分が直線的に反転する。口縁端部はナデ調整の影響により面が作出されている。調整は、内外面共に摩滅が激しいため、詳細は不明である。36は、直口壺の口縁部の破片である。復元口径は15cm、残存高は8.5cmである。胴部上半は丸みをもち、直線的に外傾する口縁部へとつながる。口縁端部はナデ調整の影響により面が作出されている。外面は胴部上半に斜め方向の細かいハケメ調整、口縁部は縦方向のハケメ調整が施されている。内面は口縁部には横方向の細かいハケメ調整、胴部はナデ調整である。37・38は甕あるいは壺の底部の破片である。37は残存高レンズ状を呈する底部から緩やかにカーブを描きながら立ち上がる胴部を有する。胴部最大径は中位の可能性が高い。外面調整は縦方向のハケメ調整後、ナデ調整。内面調整はハケメ調整が施されている。38は底部の形態は丸底に近いレンズ状を呈し、外轡気味に胴部に向かって立ち上がる。内外面共に摩滅が著しく、調整の詳細は不明であるが、内面にわずかながら成形時の指オサエの痕跡が認められる。

39は鉢である。復元口径は28cm、器高は23.3cmである。底部は丸底で胴部にかけて外轡気味にカーブしながら立ち上がり、口縁端部に向かって直立する。口縁端部は強いナデ調整の影響で面が作出されている。外面は底部から胴部中位にかけて摩滅している部分が認められ、詳細は不明であるが、全面的にハケメ調整が施されていたと考えられる。口縁部付近はハケメ調整後、強いナデ調整が認められる。内面は口縁付近から縦方向のハケメ調整を行った後底部に斜め方向のハケメ調整を施している。外面同様に口縁端部付近では強いナデ調整が施されており、やや溝状を呈している。

40～42は高坏である。40は坏部の破片である。復元口径は27.4cm、残存高5.1cmである。坏部は緩やかに屈曲し、口縁部に向かって外轡気味に外に大きく開く。口縁端部は強い横方向のナデ調整により面が作出されている。内外面共にナデ調整が施されている。胎土は非常に精緻で作りが丁寧である。弥生後期後半頃と考えられる。弥生後期後半頃か。41は、脚部の破片である。残存高は11.1cmである。脚柱部と裾部の境は不明瞭である。内外面ともに磨滅が著しく調整の詳細は不明である。胎土が非常に精緻で丁寧な作りである。42は、高坏の脚部の破片である。復元脚部径は15.4cm、残存高は10.2cmである。脚柱部と裾部の境は不明瞭である。脚部端はやや面が作出されているように見えるが磨滅が激しく判断は困難である。厚みは薄く5mm前後で、胎土も精緻であり、非常に丁寧なつくりをしている。外面調整は細かい縦方向のハケメ調整であるが、一部磨滅により消えている部分が見られる。内面調整は裾部分では横方向のハケメ調整が施されている。それ以外はナデ調整であるが、成形時の指オサエと絞りの痕跡が認められるなど丁寧なものではない。弥生後期後半か。

43～46は器台である。43は、器台の受部から裾部の破片である。受部と裾部の屈曲部は明瞭で外轡しな



第12図　SC015出土遺物実測図（1）（1/3）

がら口縁端部に至る。口縁端部は軽くナデ調整が施されているため、隅丸方形状を呈する。外面調整は受部にはナデ調整、裾部には上から下に向かってハケメ調整が施されている。内面はハケメ調整後にきれいにナデ調整が施されている。裾部はナデ調整であるが、成形時の指オサエの痕跡が数箇所認められる。44はほぼ完形品である。受部口径は14.4cm、器高17.8cm、底径16.4cmである。受部と脚部境は緩く屈曲し、境は不明瞭である。脚部は直線的に外方向に広がる。受部の端部はきちんと面が作出されている。外面はハケメ調整が施されているが磨滅のため消えている部分が多い。内面は受部および脚部端部付近には細かいハケメ調整、その他はナデ調整が施されている。脚部上位の受部に近いところでは、成形時の指オサエの痕跡が明瞭に残っている。弥生時代後期後半頃か。45は器台脚部の破片であろうか。底径は17.8cmを測る。ほぼ直線的に立ちあがる脚部を持つ。外面調整は縦方向のハケメ調整、内面は脚端部付近では横方向の強いナデ調整、その他は斜め方向のナデ調整である。成形時の指オサエの痕跡が明瞭に残っている。46は、器台の受部付近から裾部にかけての破片である。残存高は10.6cmである。外面調整は縦方向のハケメ調整、内面は裾部の下半には横方向のハケメ調整が施されている。受部に近い部分では成形時の指オサエの痕跡が認められる。

47は、杏形支脚である。天井部6.5cm、器高11.2cm、底径17.2cmである。表面は非常に凹凸が認められ、作りは粗い。側面に赤変しているところが一部あり、被熱によるものと考えられる。外面はタタキ調整の後軽くナデ調整が施されている。内面はナデ調整が施されているが、成形時の指オサエが明瞭に残るほど粗く施されている。

出土鉄器（第13図）

48は不明鉄器である。断面が幅7mm、厚さ4mmの扁平な長方形を呈する。刀子あるいはヤリガンナの基部の可能性が高い。

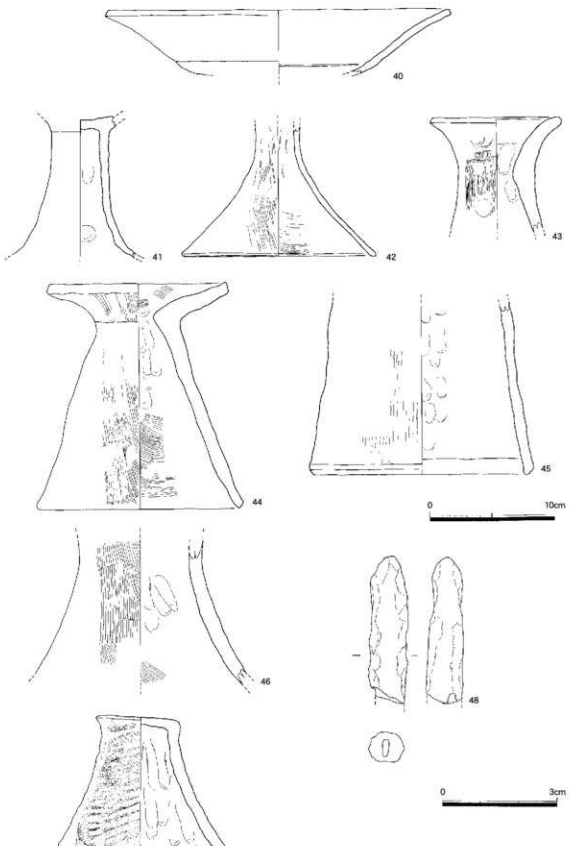
出土石器（第14図　図版2）

49は桂化木製の抉入片刃石斧である。長さ11cm、幅3.7cm、厚み3.1cm、重さ182gである。全面に研磨が施されている。中央やや上方に幅3cm程の浅い抉りが認められる。

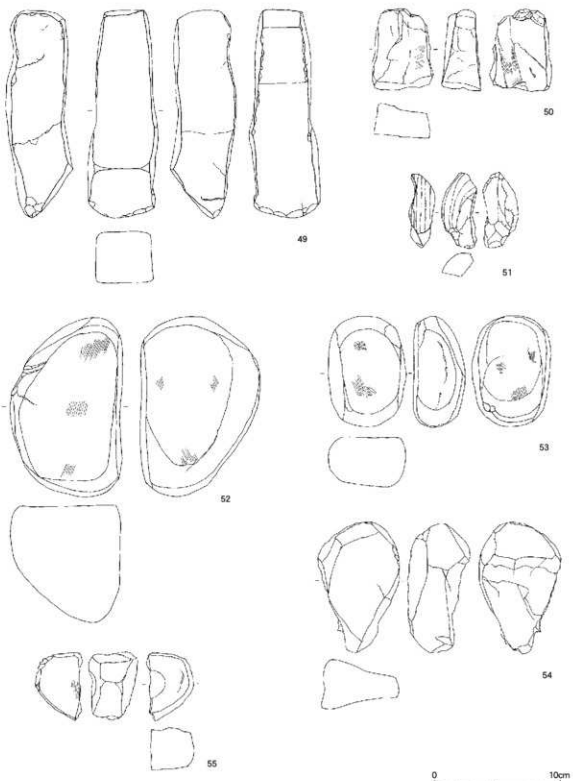
50は先端部に認められる剥離痕より、敲石と考えられる。長さ6.33cm、幅4.83cm、厚み3.11cm、重さ117.9gである。下端部は欠損しており不明であるが、上端部に2カ所の敲きによる剥離が認められる。表・裏両面ともに部分的に研磨痕跡が認められ、その研磨痕は下半の欠損よりも新しい。したがって、ハンマーストーンとしての利用の際に割れてしまったため、砥石として転用したと考えられる。花崗岩製。

51～54は磨石である。51は、長さ5.94cm、幅2.25cm、厚さ1.82cm、重さ30.1gである。花崗岩製磨石の破片である。大半は欠損しており不明であるが、側面に研磨痕跡が確認できる。52は花崗岩製の磨石である。長さ14.1cm、幅8.9cm、厚み9.45cm、重さ1498gである。断面三角形状を呈し、表面と右側面の2面に平坦な研磨面が認められる。研磨面は部分的に筋状の擦痕がみられる。53は長さ8.75cm、幅6.04cm、厚み4.26cm、重さ332gである。花崗岩製で、表・裏・右側面部分ともに研磨痕跡が認められる。表面下部には敲いた痕跡のような窪みがみられるが人工的に生じたものかの判断は困難である。54は、長さ10.4cm、幅6.4cm、厚み4.5cm、重さ299gである。花崗岩の中でも石英が集中している石材を利用している。石英の部分を中心に研磨痕跡が認められる。形状から磨石としておくが断定はできない。

55は凹石の破片である。長さ5.5cm、幅3.84cm、厚み3.73cm、重さ82.8gである。右半分は欠損しており不明であるが、楕円形状を呈していたと思われる。表面には窪みは見られず、一部研磨痕跡が認められる。表面は残存面全体に研磨痕跡が認められるとともに径1cm程の窪みが見られる。花崗岩製。



第13図　SC015出土遺物実測図（2）（1/3）



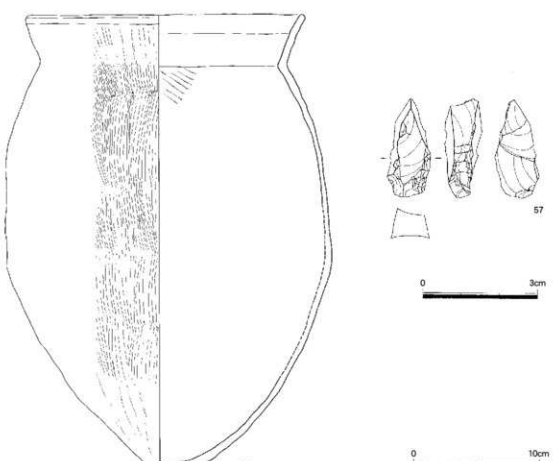
第14図　SC015出土遺物実測図（3）（1/3）

柱穴内出土土器（第15図　図版2）

56は住居の西側の柱穴から出土した甕である。口径は21.0cm、器高は36cmである。底部は丸底に近いが、やや平坦面をもっている。レンズ状の底部に含まれると考えられる。胴部は中位で最大径をもつ。直線的にすぼまる肩部から強く屈曲し直線的な口縁部へとつづく。口縁端部は強いナデにより面が作出されている。厚みは5㎜～7㎜と非常に薄い。外面調整は口縁部がタテ方向のハケメ調整の後強い横方向のナデ調整が施されている。胴部は縦方向で細かいハケメ調整、底部は磨滅が著しく、ハケメ調整後ナデ調整が施されているのか、ハケメ調整のみであるかは判断できない。内面調整は口縁部が横方向の強いナデ調整、肩部はハケメ調整後ナデ調整、胴部から底部にかけては丁寧なナデ調整である。ススの付着が半面のみに見られる。付着部位は胴部最大径以下15cm程にススが帯状に認められ、口縁部付近にも一部確認できる。弥生時代後期後半から終末頃と考えられる。

柱穴内出土碧玉（第15図　図版2）

57は碧玉の剥片である。白みがかった緑色を呈する。長さ2.6cm、幅1.1cm、厚み1.0cm、重さ2.36gを測る横長の剥片である。管玉を製作する際の素材剥片である可能性が高い。表面（正面）では、左上方向からの加撃による剥離が行われており、明確なバルブが形成されている。裏面も同じ方向の剥離面があり、平坦打面からの連続する剥離調整が想定される。また、左下縁部で裏表両面からの加撃による剥離痕、右下縁部にも表裏の両面からの加撃による細調整痕が認められる。これらの細かい剥離は角錐状形態への成形目的の細調整とみなすことができる。



第15図　SC015柱穴出土遺物実測図（1/3・1/1）

2）溝

SD014（第11図）

調査区北西部で検出した。SC015と切り合い関係にあり、本遺構が後出する。攪乱により規模の詳細は不明であるが、1.9mを超えることはない。深さは約17cmである。時期は不明である。

3）井戸

SE021（第16図）

調査区北西隅で検出した。SC003中央の炉跡に後出する。当初、SC003に伴う遺構と誤認し掘り下げをおこなったため、一部掘方を失ってしまったが、およそ短軸25cm×長軸32cmの楕円形状を呈し、深さ約95cmを測る。底面はやや窪み気味で、湧水が確認された。井戸の可能性が高い。底面の標高は12.71mである。埋土は茶褐色粘質土で非常に硬く締まりがある。遺物は小片のみで図化することができるものはなかった。時期は不明である。

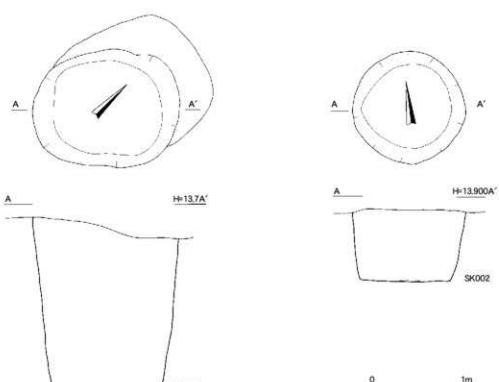
4）土坑

SK002（第16図）

調査区中央やや西よりで検出した。円形状を呈する土坑である。規模は直径60cm、深さは40cmを測る。底部は水平で、立ち上がりはほぼ垂直である。埋土は黒褐色粘質土で遺物の出土はないため時期は不明である。

5）ピット（第17図）

調査区内では多数のピットが検出されたが、図化できる遺物は少なかった。58は029ピット出土の磨石である。長さ6.51cm、幅3.98cm、厚み3.2cm、重さ108gである。裏面は剥落しており詳細は不明であるが、表面と右側面は全面研磨痕跡が認められる。花崗岩製。59は025ピット出土の磨石である。長さ**8.28cm**、幅5.92cm、厚み4.87cm、重さ251gである。全面に研磨痕跡が認められ表面上端部に敲打痕の**よ**



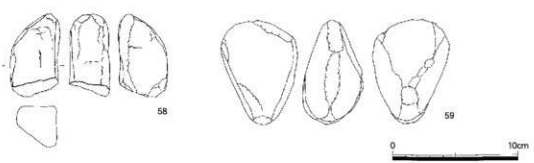
第16図　SE021・SK002実測図（1/40）

うな剥離が見られる。また裏面には打撃を受けたような剥離が見られるが、人工的なものかの判断は難しい。敲石と磨石の両機能を兼ね備えた製品であった可能性がある。花崗岩製。

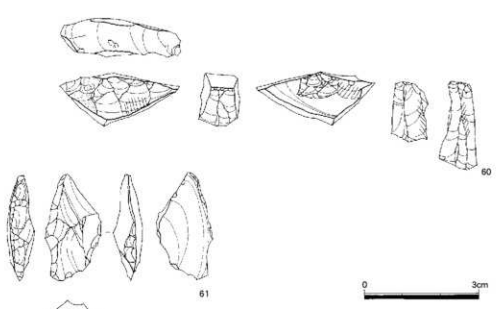
6）その他（第18図）

60はにぶい赤褐色のローム上、調査区南側より出土した。舟形細石刃核である。やや白く濁る黒曜石を素材とする。長さ1.4cm、幅3.1cm、厚み1.1cm、重さ3.97gのやや厚みのある板状の剥片を素材としている。上面は平坦な甲板面で、その面からの加撃を加え、両側辺へ水平に近い調整剥離により両側面を整えている。底面側からの石核調整は認められない。細石刃剥離は左側面からおこなわれ、右側面は細石刃を剥離しようとした痕跡が見られる。平坦打面を持つことと、そこから側面調整を行うことは「船野型」細石刃核のカテゴリーに含められるものに類似する資料である。

61は表採品である。ナイフ形石器で長さ2.8cm、幅1.5cm、厚さ0.8cm、重さ1.74ｇである。漆黒の黒曜石で、表面がやや風化している。左縁のすべてと右縁の下部に調整が施される二側辺加工ナイフ形と思われる。しかし、両側縁の調整は連続したものとなっておらず、斜刃を除けば台形石器と同じような形態となっている。



第17図　ピット内出土遺物実測図（1/3）



第18図　包含層・表採遺物実測図（1/1）

3.まとめ

当調査地点では、弥生時代後期から終末にかけての住居を3軒と時期不明の溝1条、井戸1基、土坑1基、多数のピットを検出した。ここでは、まず調査区内の主体を占める弥生時代後期から終末にかけての集落についてのまとめをおこなったのち、管玉製作に係る剥片資料、旧石器時代の資料について触れ、調査のまとめとしたい。

（1）弥生時代後期後半から終末にかけての集落について

当調査地点では、弥生時代後期後半から終末にかけての住居が3軒検出された。近隣の2・5・6・12・28・37次調査区と併せて考えると（第3図）、37次調査においては住居が検出されていないことから、当該期の集落の拡がりは、南は28次調査地点から始まる。12次調査地点で最も濃密になるが、北側の6次調査地点にいくと分布は散漫になり、そのさらに北側に位置する本調査地点では分布密度は低くなる。本調査地点でSC015が住居の南半分を確認しており、この集落は北に拡がるものと考えられる。集落の東側は調査事例が少ないが、2次調査の成果から南半から墓地としての土地利用がなされていることが確認されている。今後、周辺の調査例が増えるにしたがって集落の規模や構造が明らかになっていくのを期待したい。

またこの集落の性格であるが、南接する6次調査地点では青銅器の鋳型が2点出土している。その他11・17次調査区で出土しており、またガラス勾玉の鋳型が17次調査地点から出土していることから、この集落は、須玖岡本遺跡の近くにあって、鋳造に関して重要な位置を占めていたと考えられる。しかし、今回の調査では青銅器製作を初めとする鋳造関連の資料はなかった。一方で、SC007の床面からガラスの小玉が2点出土し、SC015からは後述する管玉製作に係る碧玉剥片が柱穴から出土している。玉作りとなんらかの関係性を示唆する遺物として重要であるが、詳細は明らかではない。

（2）管玉製作に係る剥片資料について

本調査区の住居（SC015）の柱穴内の甕から、碧玉の剥片が出土している。碧玉の剥片は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての管玉製作に係る遺物として、吉留秀敏氏によって注目されていたものである（吉留2009ほか）。吉留氏は箱崎遺跡47・52次調査地点、博多遺跡群17・118・166次調査地点の資料を中心に碧玉製管玉の剥離技術と製作工程の復元を行っている（吉留2000）。吉留氏によると、管玉の素材となる縦長剥片を目的とした剥離を行う1次工程から角錐状形態への成形段階である2次工程、荒研磨・仕上げ研磨・穿孔を施す3次工程を経て管玉として完成すると想定している。

本資料は、左右下縁部には表裏両面からの細調整痕が認められる。この調整痕は角錐状形態への成形目的の細調整とみなすことができ、細かな調整剥離によって整形していることと、研磨直前段階であることからも吉留氏による製作工程の2次工程の終末に位置付けられよう。

さて、次に出土状況についてみていく。碧玉の剥片の出土状況は包含層などの廃棄例が多い。本資料と類似する柱穴出土の事例は、三苫永浦遺跡（吉留編1996）でのSC02、SC07の2事例が挙げられるのみである。その他、柱穴内に限定せず住居内での出土としても、三苫永浦遺跡SC01・04、博多遺跡群17次調査（1985）SB164における住居隅に集約された状態での出土の3事例と非常に少ない。住居内の出土という他に比べ特異な出土状況に対し、吉留氏は「住居が製作跡というより別に製作所があり、なんらかの要因で住居内か、住居廃絶時に剥片が少数持ち込まれた（投棄された）と考えられる」とし、「玉類製作に関わる破片などに玉生産行為とは異なる意味が付与された可能性」を指摘している。井尻B遺跡は、ガラス小玉をはじめとする玉生産に関わりが深かった集落と考えられているが、本調査区ではガラス小玉製作や碧玉製管玉製作に直結する遺物・遺構が検出されなかった。一方で、SC007の床面からはガラス小玉の製

品が2点出土し、SC015の柱穴からは碧玉の剥片が出土していることから、吉留氏の指摘同様、剥片だけにとどまらず製品も含めて玉に対して何らかの意味が付与され廃棄された可能性が高い。

では、井尻B遺跡内で碧玉製管玉製作が行われていたのかという問題であるが、剥片が出土したのは本調査区のみである。製品に関しては、南接する6次調査区で碧玉製の管玉2点が住居内から出土している。直径4mm、長さ7mmであり、本調査地点出土の剥片から十分に作り出せるサイズの管玉である。しかし、1次工程に伴う石核調整時の剥片や研磨に用いた砥石などは出土しておらず、現段階では積極的に管玉製作作業がおこなわれていたとは言い難い。ただし、須玖岡本遺跡の近くにあり、対外交渉によって石材・技術を入手できる場所に立地していることを考慮すると管玉製作は不可能ではない。今後の調査において関連する資料の増加を期待したいところである。

(3) 旧石器時代資料について

井尻B遺跡では丘陵中央の尾根線上において、37次調査地点のような石器製作に関わる遺物密集部、定形石器を中心にやや疎らな分布を示す2次調査地点もあり、旧石器時代遺跡が残存していたと考えられている。しかし、隣接する本調査区では、細石刃核1点のみ赤褐色ローム層中からの単独出土にとどまった。同様の事例は南接する6次調査地点や12調査地点にも認められる。このことは、同丘陵上で、弥生時代後期に大規模な集落が形成されることにより旧石器時代の包含層は部分的にしか残存できなかった結果であると考えられている。ここでは、これまでの既往調査の成果を積極的にとらえ旧石器時代遺跡の拡がりを概観したい。

2次調査地点では、旧石器時代包含層が良好に残存しており、細石刃がまとまって出土が確認されている。本調査区ではわずかに残存していた包含層上から「船野型」細石刃核が1点出土している。同様の資料は南接する6次調査地点でも出土が確認されている。また、6次調査地点では、使用痕ある剥片と「原の辻」型台形石器の素材製作に関わる石核が1点ずつ出土している。同様の石核は12次調査からも出土している。これら6・12次調査地点において単独出土した「原の辻」型台形石器製作に関わる遺物は37次調査地点では密集部が検出され、井尻B遺跡において「原の辻」型台形石器の製作が行われていたことが明らかになっている。

以上が本調査区周辺の旧石器時代遺物の出土状況である。萩原博文氏は、2次調査地点でまとまって出土した細石刃は細石刃核の形態から「船野型」細石刃核に先行する石器群であり、「船野型」細石刃核を持つ集団の拠点は本調査区および、6次調査地点付近にあったものと指摘している。さらに、6次調査では使用痕ある剥片1点が出土しているが、使用痕ある剥片はおそらく原の辻型台形石器関連資料と考えられ、37次調査地点における原の辻型台形石器製作集団との関連性があると同時に舟野型細石刃核とは時間差のあるものという教示を受けた。したがって、本調査区周辺では旧石器時代にはなくとも、2次調査地点を中心とした細石刃の時期、本調査区及び6次調査区を拠点とする「船野型」細石刃核の時期、さらに37次調査区を中心に展開する「原の辻」型台形石器の時期の3時期あり、それぞれ発展していたものと考えられるのである。

【参考文献】

山口譲治・吉留秀敏編 1985「第9章　1.福岡平野における先土器時代の様相」『井尻B遺跡』福岡市教育委員会
吉留秀敏 1996「三苫永浦遺跡」福岡市教育委員会
宮井善朗 1997「井尻B遺跡5　井尻B遺跡群第-6次調査の報告-」福岡市教育委員会
田上勇一郎 2000「(3)旧石器」『井尻B遺跡7　井尻B遺跡群第-11次調査の報告-』福岡市教育委員会
田上勇一郎 2000「(3)旧石器時代の資料」『井尻B遺跡8　井尻B遺跡群第-12次調査の報告-』福岡市教育委員会
吉留秀敏 2009「北部九州の古墳時代前期玉作について―箱崎・博多遺跡出土資料を中心に―」『地域の考古学　佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』佐田茂先生論文集刊行会
柳沢一男・杉山富雄 1985「1)弥生時代の遺構と遺物」『博多II』福岡市教育委員会
吉留秀敏 2009「博多166次出土の玉作り関連資料について」久住猛雄編『博多127-博多遺跡群第166次調査報告-』福岡市教育委員会
吉留秀敏 2009「箱崎遺跡第47次調査出土の碧玉剥片類について」中村啓太郎他編『箱崎一箱崎遺跡第47次・55次調査報告一』福岡市教育委員会
萩原博文 2014「第3章　旧石器時代遺物について」阿部恭之編『井尻B遺跡23　井尻B遺跡群第-37次調査の報告-』福岡市教育委員会

図版

(1) Ⅰ区全景(東から)

(2) Ⅱ区全景(西から)

(3) Ⅲ区全景(西から)

(4) SC004・007(東から)

(5) SC015柱穴内土器出土状況(南から)

(6) SC015柱穴内碧玉出土状況(南から)

(7) SE021(南から)

(8) 細石刃核出土状況(北から)

図版 2

報　告　書　抄　録

ふりがな	いじりびーいせき　にじゅうろく
書　名	井尻 B 遺跡　26
副書名	—第 40 次調査報告—
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1252 集
編著者名	大森真衣子
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8620　福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号
発行年月日	2015 年 3 月 25 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
いじりびーいせき 井尻 B 遺跡 だいよんじゅうじ 第 40 次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 みなみくいじりよんちょうめ 南区井尻 4 丁目 ひゃくろくじゅうななばんに 167 番 2	40130	0090	33-33-03	130-26-35	2013.11.11 ～ 12.18	142	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井尻 B 遺跡 第 40 次	集落	弥生時代後期	住居址	弥生土器	

概　要

造成による影響が著しかったものの住居址が 3 軒と井戸 1 基、土坑 1 基、溝 1 条、多数のピットが検出された。住居址は全体が検出されたものはなく、残り半分は調査区外へと続いているため、全容は不明であるが、2 本主柱をもち盛土のベッド状遺構を有する一辺 5m 程度の方形の住居址が 2 軒と一辺 3m の住居址が 1 軒確認された。時期は弥生時代後期後半から終末と考えられる。遺物はパンケース 10 箱分でそのほとんどが住居址の床面直上で出土している。住居にはそれぞれ壺・甕・高坏・鉢がセットで出土している。土器以外の遺物としては、住居の床面直上から砥石やガラスの小玉が 2 点と、柱穴から甕とともに碧玉の剥片が一点出土している。また、調査区南側のローム上から細石刃核が 1 点出土している。

井尻 B 遺跡 26

－第 40 次発掘調査報告書－

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告　第 1252 集

平成 27 年 3 月 25 日

発 行　福岡市教育委員会

福岡県福岡市中央区天神一丁目 8 番 1 号

印 刷　株式会社　ハザマ印刷

福岡県福岡市南区那の川 1 丁目 20 番 23 号